特別講演会

2014年5月31日

キリスト教の再定義に向けて
ー新約聖書学の視点からー

荒井　献

こんにちは。

今、ご紹介にありましたように、私はこの大学で10年間、学長をしておりまして、その後もできたばかりの大学院の研究科長を2年間やりまして、合計12年、専任でおりました。その後も公開講座を5、6年しておりまして、ですから今日いらした方、大部分の方はそういう関係で私の話を一度聞いたことがある方々ではないかと思うのですけれども、「キリスト教の再定義に向けて」というような大それた題で話すのは初めてでありまして、あと余命いくばくもないと思っているものですから、今のうちに言いたいことを、ちょっとアジもどきの演説をしようかなと思いまして（笑）、神さまにもお許しをいただいて、私の専門の新約聖書学の視点から。

私は最初に専任になったのは青山学院大学で、しかも文学部の神学科で、キリスト教史でした。古代のキリスト教史。そして東京大学に移ってから西洋古典学科というところで、西洋古典の一環としてのギリシャ語の新約聖書を担当するようになったものですから、新約聖書学に転向いたしました。

そんなものですから、いずれにしてもどちらも歴史学的な視点からキリスト教のいわゆる聖典といわれる聖書に、あるいは最初期の歴史に関わるという、その姿勢は一貫して変わってはおらないものですから、その前提を踏まえて少し大それたお話をさせていただきたいと思います。そんなこと言っても私はあまり踏み外せない気の弱い存在なものですから、たいしたことありませんけれども、忍耐を持って最後まで聞いていただければ幸いです。

お手元に配ってあります要約、レジュメと、それから資料があります。資料は1から5まであると思います。その順序でいきますので、どちらもすぐ見られるように机の上に置いて、比較しながら聞いてくださるとお分かりになりやすいのではないかと思います。みなさんにお配りできてますでしょうか。失礼して座らせていただきます。

最初は「**はじめに**」というところからです。

一般的に、「イエスはキリストであると告白する」いわゆる信仰告白を共有する宗教が、キリスト教というふうに定義されております。その限りにおいては、キリスト教にはいろいろな教派がありますけれども、根底的には同じではないかと思います。イエスはキリストであるという告白です。キリストというのは救世主と訳されますけれど、ユダヤ教徒は現在でもいわゆる救世主の終末における到来を待望して生きております。キリスト教徒は、2000年ほど前に、おそらく30歳代の前半に亡くなったイエスこそがキリストだというふうに告白するわけで、その点でユダヤ教徒と違います。そして一般的にキリスト教では、そのイエスが十字架に架けられて亡くなり、神によって復活させられ、天に昇り、この世の終わりのときにもう一度来臨して、最後の審判を行うという考え方においては、だいたい共通して信じられているのではないかと思います。

しかしこの定義には多くの場合、イエスは始めから神の子であった、あるいは救世主であったという信仰によって、生誕の時から、あるいは生誕する前から、神と共にあったという、始めから神の子であったという信仰によって、信仰者たちの振舞いを基礎づける方向性が前提されております。例えば、ルカ福音書やマタイ福音書には処女降誕の物語がありますね。これは、神の子は人から男女の交わりによって生まれないという信仰が前提されています。聖霊によってマリアを通して生まれた、という。だからマリアは処女であったという。あるいはまた、ヨハネによる福音書では、「始めに言葉があった。言葉は神と共にあった。言葉は神であった」というところから始まって、その言葉が肉体をとってイエスになったというふうに書かれています。ですからヨハネ福音書では、始めの始めからイエスは神の子であったという信仰が前提とされております。

このような一般的な定義は、新約聖書学の視点から、キリストが元来人間の命を大切にすることを具現して生きた、あるいは生き切った存在であったという方向性に向けて、再定義される必要があると私は思っております。こういうことをはっきり言ったのは、恵泉にいて今日が初めてです。遠慮してそういうことは言えませんでした。そのことを今日は立証してみたいと思います、新約聖書学の立場から。

それで、まず1の「**新約聖書学の成果**」、つまり新約聖書学において、ほぼ定説になっている仮説についてです。これは学問上の仮説ですから絶対ということはありえませんけれども、しかし、この仮説は私たち新約聖書学者の間では

ほとんど定説になっています。しかも私は、やはりクリスチャンの方々も、あるいはクリスチャンではない方々も共通して、この定説は一応共有して欲しい。異論があるならちゃんと出してほしい、反論いたしますので。それは2つです。ひとつはいわゆる二資料仮説というものです。

これは、マタイ福音書の著者のマタイと、ルカ福音書の著者のルカは、2つの資料を踏まえて自らの福音書を独自の立場から編集したという、二資料仮説と呼ばれるものです。2つの資料のひとつはマルコによる福音書です。もうひとつは、マタイとルカが共通して用いたと思われるイエスの語録集です。例えば、有名な山上の説教があります。あれはマルコ福音書にはありません。マタイとルカに共通してあるイエスの説教です。これを我々の専門用語で言いますとQ文書（キューもんじょ）と言います。これはドイツ語のQuelle（クエレ）から来ています。Quelleというのは資料という意味ですので、英語のsource（ソース）にあたります。それでキュー、ドイツ語ではクーと言いますけれど。

これは最近、最近と言っても1970年代以降はQ文書と呼ばれます。マタイとルカは、すでに文書となっていたイエスの語録集を資料として福音書を編集した。いわゆるQと言われるものが単なる資料ではなくて、すでに文書（もんじょ）として成立していたのだということを立証したのは佐藤研（さとうみがく）君です。立教大学に長く勤めていましたけれど、この3月で定年になりました。昔の私の学生は次から次へと定年になっておりますので、私も長くはないと思いますが。彼は『Qと預言書』という題の大著をドイツ語で書いております。これは、我々の学会では、これなしではQ資料を語られないというほどの影響を与えました。それが一点です。

おそらくマルコによる福音書は70年代の初めに書かれた。それまで伝わっていたイエスに関する伝承を資料として。しかしマルコは、いわゆるQ文書は知らなかった。それに対してマタイとルカは、マタイはおそらく80年代、ルカは80年代のおそらく後半ぐらいに、マルコによる福音書を資料として、それからQ文書を資料として福音書を書き直したのです。そこから、この福音書記者の編集意図というのが問われます。各福音書では前提資料に対する福音書記者の編集作業を通して、彼らに固有な編集意図とそれに基づくキリスト理解が展開されている。従って、各福音書にはそれぞれのキリスト理解に多様性があるということです。

今から、どういうふうに多様性があるかということを確認していきますけれども、そういう作業を行わないで、ただイエスはキリストであると信ずるというのは盲信になります。その程度のことは共有して欲しいと思います。せっか

く我々がやってるのですから。しかも、これはだいたい国際的に認められてるわけですから。その実例を以下に３つあげます。

実例１は「麦穂摘みの物語」です。イエスの弟子たちが麦の穂を摘んだという物語ですね。これは資料の１というところに、マルコとルカとマタイと、各聖書の箇所を並列しておきました、比較しやすいように。まずマルコの方を読んでみます、一番最初に書かれた福音書ですから。これをルカとマタイはどう直しているかということです。

> ある安息日に、イエスが麦畑を通って行かれると、弟子たちは歩きながら麦の穂を摘み始めた。

ファリサイ派の人々、これは当時の律法に一番厳格に従った派の人々です。

> ファリサイ派の人々がイエスに、「御覧なさい。なぜ、彼らは安息日にしてはならないことをするのか」と言った。イエスは言われた。「ダビデが、自分も供の者たちも、食べ物がなくて空腹だったときに何をしたか、一度も読んだことがないのか。アビアタルが大祭司であったとき、ダビデは神の家に入り、祭司のほかはだれも食べてはならない供えのパンを食べ、一緒にいた者たちにも与えたではないか」。そして更に言われた。「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない。だから、人の子〈これはイエスのことです〉※は安息日の主でもある」。

時間がありませんので旧約聖書の詳しい背景は省きますけれども、安息日（び）、あるいは安息日（じつ）というのは元来、古代イスラエルにおける農民の農耕生活における、命の休息のために定められた掟でありました。つまり一週間のうちこの日だけは、労働をやめて休むようにという。ところがこれが、年が重なるに従って、安息日に行ってはならない禁止条項が律法として定められ、この律法、あるいは掟の中に麦穂摘みというのもあったのです。麦の穂を摘むというのは、安息日にしてはならない労働であったのです。だからイエスの弟子たちは、明らかに安息日律法を犯したのです。

にもかかわらずイエスは、27節で「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない。」と断言しました。

当時のユダヤは、祭政一致でした。政治と宗教は一緒になっていたのです。で

すから、律法というのはほとんど国法といっても差し支えないと思います。人間の命は国家によって拘束されないということなのです。そして28節に、「だから、人の子は安息日の主でもある。」とあります。「人の子」というのは元来、人間を意味する集合名詞でありますが、福音書ではこれがイエスの自己呼称として用いられる場合が多いですね。自分のことを人の子という場合がある。

イエスは人間の命を大切にして、それを具現して生きた、あるいは生き切った存在でした。イエスの権威は、この人間の命の尊厳によって基礎づけられているのです。「だから、人の子は安息日の主でもある」。

こう書いていることを、きちっと踏まえなければいけません。多くの場合、マルコ福音書は、マタイ福音書とルカ福音書の間にあるものですから、読み飛ばされる場合が多いんですね。最初にマタイを読んで、「ああ、同じことをマルコもルカも書いている」と思ってやめてしまう人が多いのです。だけれども、マルコ福音書とマタイ福音書あるいはルカ福音書は、かなり方向性が違うのです、今から話しますように。

次にルカ福音書の場合です。まず、はっきり言っておきますけれども、マルコ福音書の2章27節の一句が、明らかに削除されているのです、ルカ福音書にはないのです、どこを見ても。あると思う人は手を挙げてください。ありませんので。ないものはないとしか言いようがありません。これはルカが意図的に落としたんです。これでは困ると思って。あまりにもイエスがラディカル過ぎちゃって、キリスト教の掟が律法へと変わっていく時代において、それでは困るのです、だからルカはマルコ福音書2章27節の句を削除しました。「人の子は安息日の主である」というのは、削除しません。これはどういうことかといいますと、ルカの論理でいきますと、だからキリストの弟子たちも安息日律法に拘束されないということになるのです。キリストが安息日の主であるから、イエスの弟子たちも安息日に拘束されないという解釈なのです。つまり人の子としてのキリストの権威が、キリストに従う者たちの振舞いを基礎づけているのです。これが一般のキリスト教の方向性です。

マタイの場合は、もっと手が込んでいます。まず、やはり、マルコの2章27節の言葉は削除してあります、マタイも。そして最後の8節に、“だから”「人の子は安息日の主なのである」というのが続いております。これはみなさんのお手元にコピーして配っていただいた、このいわゆる対観表では、「人の子は安息日の主なのである」というふうに訳されていますけれども、ギリシャ語には“だから”という小辞があります。「“だから”、人の子は安息日の主なのである」と。その“だから”というのは、前の文脈を見れば明らかです。すなわち、マ

タイはこの言葉の前に5節から7節までを挿入して、人間の命の大切さを、人間に対する人の子の憐れみによって基礎づけております。イエスは弟子たちを憐れんで麦穂摘みを許したという。

以上のことは、先の司会をしてくださった李省展さんが触れてくださった、私がまだ青年時代に書いた『イエスとその時代』という本（岩波新書）にもすでに指摘してありますし、それからもう少し詳しくは『イエス・キリストの言葉』という、「福音書のメッセージを読み解く」という副題で、岩波現代文庫の中に収められている本で確認してください。

今度は**実例2**「片手の萎えた人の物語」です。これも資料の2というのに、マルコを中心としてマタイとルカ、上と下に比較できるようにコピーしてあります。

安息日に関しては、先ほどお話した実例1と同じです。重要なのは、マルコ福音書の場合は4節です。ここでイエスは人々に向かって「安息日に善を行うのと悪を行うのと、命を救うのと殺すのと、どちらがよいか」と、問うております。これはイエスが片手の萎えた人を安息日に癒したという癒しの奇跡物語を前提とした物語になっております。癒しは労働、治療行為ですから、労働とみなされたわけですから、安息日にしてはならないことをイエスはした、というのが前提にされております。

人間の命を救うことが、癒しを禁じた安息日律法の例外規定としてではなくて、あとで触れますように、この時代のユダヤ教の律法でも命の危険にさらされた場合、動物や人間を救っても良いという例外規定がありました。その例外規定としてではなくて、そうではなくて、善を行うことに一般化されております、このイエスの言葉では、癒すことが。それから律法に忠実であることは「人を殺す」「悪を行うこと」になると断言されております。これはやはりものすごくラディカルです。つまりイエスは、マルコ福音書によれば、律法に逆らっても人間の命を生かす存在でありました。それがルカ福音書ではどうなっているでしょうか。

ルカ福音書では、6章9節に先ほどのマルコ福音書の4節の言葉がほぼそのまま残されておりますが、これを14章5節「あなたがたのうちで、自分の息子か牛が井戸に落ち込んだならば、安息日だからといってすぐ引き上げてやらない者はいるだろうか」から判断いたしますと、危険にさらされた生き物の命を救うことは許されているという、ユダヤ教における、安息日律法の例外規定の

拡大として4節のイエスの言葉が位置付けられております。

しかもマルコ福音書の5節では、「イエスは怒りを含んで彼らを見まわし、その心の頑ななのを嘆いて、「その人に手を伸ばしなさい」」と言っていますね。ここではイエスが怒ったのです。ところがこの「怒りを含んで」という句は、ルカ福音書の10節、マタイ福音書の13節では削除されています。マタイやルカでは、イエスは怒らないのです。やさしいんです。私はしょっちゅう怒りますけど（笑）。なにもイエスをまねしたわけじゃありませんけれども、そんなヤワなものじゃないんです、イエスの教えというのは。

イエスはいわゆる社会的な弱者に対しては、どうかと思われるほどやさしくありました。しかしその弱者を踏み台として生きようとする、いわゆる強者に対してはものすごく怒りました。だから十字架刑に処せられたのです。

次にマタイの場合。マルコの4節の言葉は、マタイでは12節にあたります。12節では「だから安息日に良いことをするのは正しいことである」と書き直されており、11節から12節を挿入することによって、ルカの場合と同様に、ユダヤ教の律法の例外規定の拡大として編集されて、マルコ福音書の5節の「怒りを含んで」は13節で削除されております。

つまりマタイ福音書では、イエスは律法、あるいは律法の例外規定に忠実に人間を生かす存在でありました。これも『イエス・キリスト－下－』という私の著書の中にさらに詳しく書いてあります。ちなみに、ペテロあるいは弟子たちを叱るイエス、これはマルコ福音書の8章30節とか33節とか、10章14節を見てください。少なくともこの3ヶ所でイエスは叱っております、ペテロとか弟子たちを。が、マタイやルカの並行箇所では削除されております。マタイの16章20節、33節、19章14節、ルカでは9章22節。

それから**実例3**「空の鳥、野の花」です。実例3というのは私と川島貞雄さんが監修して作った対観表をコピーしてきたのですけれども、2ページにわたっているものですから2枚になっておりますけれども、資料の3.1.と3.2.です。この対観表では「思い悩むな」という小見出しのついている箇所です。

この物語はマルコ福音書にはないですね。そうではなくてマタイとルカにしかありません、マタイとルカにしかないイエスの言葉です。ですから先ほども言ったQ文書に遡っていくことになります。しかし詳細にあたって比較してみますと、かなり違う点があります、マタイ版とルカ版では。これは有名な「空の鳥、野の花」と題してよく引き合いに出されるイエスの言葉です。

まずルカ福音書の24節の烏です。漢字ではちょっと鳥と烏と読みにくくて、

ときどき間違って烏のことを鳥と読んでしまう牧師がよくあります。でも、違うのです、マタイとルカは。それにこだわるのが聖書学というやつです。そこまでこだわる必要はないんじゃないかと言うのだけれど、それが大切なんです。

マタイの26節は「天の鳥」となっているのです。ルカでは「天の」というのがないのです。「烏」なのです。先ほどQ資料に遡ると言いました。マタイとルカが共通して用いたイエスの語録集、どちらが本当なんだろうと、烏と鳥と。

これには一応、伝承の法則というのがありまして、実際には新約聖書学だけの問題ではなくて、特にロシアで発展した民話学で民間伝承の物語の変化していく過程を追った研究はいくらでもあります。その場合に具体的な固有名詞から、普遍的な普通名詞に変わっていくという伝承の法則があります。その法則から見まして、第一に、おそらく烏の方が鳥よりも伝承史的に古い段階を示しているのではないか、つまりその限りにおいてはルカの方に古い、おそらくイエスに遡る言葉が保存されているのではないか。

「天の鳥」というと何か牧歌的になってしまうのです。そうではなくて烏、しかもこの烏は複数形なのです。これはおそらく、ゴミだめに集まる烏ではないかと私は思うのですけど。そこまで考えなくても、少なくとも「天の」というのはルカにはありません。しかも旧約聖書の、たとえばイザヤ書34章11節あるいは13節など、これは旧約聖書の新共同訳では1115ページですから、お持ちの方は開いてみれば確認できますけれども、旧約聖書のイザヤ書34章11節ではみみずくと烏が、13節では茨とあざみが汚(けが)れた存在とみなされています。この世の終末における自然の荒廃を予言する箇所で、烏が飛んできてあざみが生えるという。つまり烏とあざみというのは旧約聖書的な背景では、もちろん例外もありますが、一般的に、特にイエスの時代は、汚れた存在とみなされておりました。

「花」というのは、マタイでもルカでも同様ですが、この「花」は元来あざみであったということが私の個人的な仮説です。もしも烏が元来烏（イザヤ書34章11節）だったならば、おそらく花（イザヤ書34章11節）も元来は固有名詞だったはずだ、とすればあざみではないか、というのが私の説です。

しかも、こういうところで言っては良くないかも知れませんが、4年前に亡くなった、私の妻・荒井英子は、アザミ先生と呼ばれてました（笑）。私が、野の花はアザミであるという仮説を発表したとたんに「自分はアザミだ」と言いだしまして。アザミのハガキとかを集めていましたし、自分のブラウスとか、あるいは枕カバーとかにアザミの刺繍をしてました。それから食器でもアザミの絵を描いた食器をたくさん収集しておりました。

あざみというのは、これはこの聖書の箇所を読んでもらえばわかりますように、一方においてソロモンの栄華に例えられております、ソロモンが着た衣よりも野の草花の方が美しいというふうに。ソロモンの王衣というのは紫衣（むらさきごろも）です。もちろん当時の遊女も紫衣を着ていました。ですから紫アザミというのは両義性があるのです、いずれにしましても。それから、あざみは枯れると燃料にされます。このイエスの話の中にも、炉に投げ入れられる草花というのが出てきますね。

そういうことで、イエスは汚れの存在とされていた烏、あるいは保存する価値のない野辺の草花、おそらくあざみを指して、それを人間の、今生かされてある命へのアピールとして受け取るように促しております。元来イエスはそういう形でこの話を聴衆に語ったと、私は受け取っております。

ところがルカはそれをどう解釈しているか。ルカの解釈は12章33～34節に出ているのです、この話が終わった後で。「自分の持ち物を売り払って施しなさい。擦り切れることのない財布を作り、尽きることのない富を天に積みなさい。そこは、盗人も近寄らず、虫も食い荒らさない。あなたがたの富のあるところに、あなたがたの心もあるのだ」という。自分の所有、持っているもの全部施して無一物になれ、そして生きよ、と。これはルカ福音書が特に強調する点なのです。つまり乞食僧（こつじきそう）です。そういう宗教的な理念に沿って、ルカ福音書の著者はイエスの言葉を解釈しました。つまり無一物になる。つまり烏や野の花（あざみ）と同じように。それでも神は養ってくださるという、そういうふうに解釈するように促しています、読者に。

ところがルカ12章33～34節に並行する箇所は、マタイでは6章19～21節にあります。これはルカ福音書の場合と文脈が違うのです。マタイの方は「空の鳥・野の花」についてのイエスの言葉の前の文脈に置かれているのです。それほどマタイとルカでは編集のしかたが違っているのです。

マタイ福音書の場合には33節です。一般的にここの視点でこのイエスの物語を読む場合が多いのです。マタイは「何よりもまず、神の国と神の義を求めるために思い悩んではならない」という視点から、このイエスの言葉を解釈するように読者に促しております。

「神の義」というのはマタイ福音書に多く出る、マタイ福音書に固有な概念です。この神の義を求めるという視点から、この物語を解釈するようにと読者に促している。ですから、おそらく私はこの伝承の一番古い層では、マタイの場合には11節ですか、ルカの場合では29節ですか、その辺で終わっていたのではないかなと思います。あとは福音書ができるまでの過程において、あるい

は福音書記者が書き加えたと、私たちの立場から見ざるを得ないと思います。

それでは「**終わりに**」というところにいきます。まず私が強調したいのは、キリスト教において信仰告白の対象となっているキリストは、元来「人間イエス」であるということです。そしてこのイエスは、力無き者、病む者と同じ地平に立って、命をかけて彼らを彼らの苦しみから解放し、彼らに解放の主体として生きることを促しました。人間は自然とともに生かされて“ある”のです。同時にイエスは、自然と人間の命の尊厳を奪い尽くして、差別や偏見を甘受させるような政治的な権力や宗教的権威に対して、厳しい現実批判の振舞いに出ました。

ここで私が遺稿集として編集し教文館から出した、亡くなった妻の荒井英子の『弱さを絆に―ハンセン病に学び、がんを生きて』（2011 年）の 372 ページから引用してみたいと思います。

これは「伝道者たちの言説における戦争被害者の不在―熱河伝道の場合」という論文からのコピーです。「熱河」というのは、日本が傀儡国家として現在の中国の北東部に作った国家、旧満州国の熱河省というところですが、ここに日本人が、特に京都の教会を中心として伝道者を送って伝道いたしました。この熱河に、渡辺祐子さんと中国人の張宏波（チャン ホンボ）さんと英子の 3 人が、野田正彰先生を団長として聞き取り調査に行ってきました。

今から紹介する箇所は、渡辺祐子さんと張宏波さんと荒井英子の共著で、『日本の植民地支配と「熱河宣教」』という本になって、いのちのことば社というところから比較的最近出ております。

> ここに熱河伝道の性格がいみじくも現われていよう。すなわち、伝道に福井〈熱河伝道の伝道者の代表的な人物です〉も後述する砂山貞夫も、本人の意識としては非政治的宣教活動を自認しているが、彼らが伝道に出かけた監獄には、日満軍・憲兵・警察などに捕まった無数の中国人がおり、また砂山が医療伝道に出かけた村々には、無人区〈日本の軍隊が万里の長城沿いにある地域を全部無人にして、そこの住人を強制収容所に収容した〉・三光作戦〈焼き尽くし殺し尽くし、奪い尽くす作戦〉の犠牲者であった農民がいた。彼らが祈りと伝道に明け暮れしていたのは、まさにそのような時期であった。〈日本から派遣された伝道者が〉それを「次元の異なる世界の出来事」と捨象し、「ただ聖言にのみ生きる」道を説いたところに、熱河伝道とりわけ福井の伝道の特徴が現われている。

「聖言にのみ生きる信仰」と「血を流し合っている現実」とが接点を結ばない。言い換えれば信仰と人権（人間の尊厳）の乖離という問題である。

この「信仰と人権の乖離」というのは、残念ながら、マタイ福音書やルカ福音から始まっているのです。

しかしこれは、熱河伝道に固有の問題というよりも、「伝道」それ自体がもっている問題と言えなくもない。私の研究課題の一つであるハンセン病とキリスト教との関わりにおいても、同様の問題性を指摘できるからである。〈『ハンセン病とキリスト教』という本を、彼女は1996年に岩波書店から出しております。〉近代日本のキリスト教「救癩」活動は、ハンセン病患者救済への並々ならぬ情熱をもって始められた。〈これは恵泉も例外ではありません。創立者・河井道もそうでした。〉しかし同時にそれは、「隔離」を前提にして行われたものであった。療養所伝道によって伝えられた福音は、端的に療養所での隔離生活を生き抜くために、十字架のイエスを仰ぎ、不満や怒りを静め、さらに皇恩〈天皇の恩ですね。〉に感謝して生きるようにとの勧めであった。信仰者は社会的変革などを求めるのではなく、どんなに屈辱的な政策であれ、社会の偏見差別であれ、信仰を鍛える試練として受け入れなければならなかった。〈彼女は多磨全生園の牧師をしてました。〉こうして療養所で説かれた「苦難の受容」は、結果として「隔離の受容」を入所者たちに促していくことになる。人間の尊厳が踏みにじられていることを、宗教的言説が覆い隠すのである。このような「伝道」の果実として、苦難に打ち勝つことこそ真の信仰であるとの確信に満ちたクリスチャンが生まれる。一九九八年にハンセン病元患者らが提訴したハンセン病国家賠償訴訟において、原告に加わらなかった在園のキリスト者から以下のような発言が聞かれた。「宗教の役割はこの世を突き抜けたところにある」、「宗教者は社会変革など求めないのだ」と。

しかし聖書に証言されているイエスは、人間性を疎外する政治的権力や宗教的権威に対しては激しい現実批判の振る舞いに出た。人間の尊厳を奪いつくして、差別や偏見を甘受させるような宗教的言説には真っ向から対立した。イエスは、時代や社会に対する批判的精神をもちつつ、病む者・力なき者と同じ地平に跣足で立ち、解放の主体へと彼らを促したのである。伝道は諸刃の剣、人々を「救済の客体」に閉じ込める方向性

と「解放の主体」へと促す方向性と、この二面性を合わせ持つ。〈福音書はこの二面性を合わせ持っているのです。〉歴史的状況を捨象して前者の道を突き進むとき〈つまり人間を、この救済の客体に閉じ込めるときに〉、時として伝道それ自体が「犯罪性」を帯びることになる。国賠訴訟の原告団長であったハンセン病回復者島比呂志は言った。「傍観は黙認であり、黙認は支持であり加担である」と。熱河伝道者たちはこの言葉をどう聞くであろうか。

熱河伝道者たちではなくてもいいのです。私たちはこの言葉をどう聞くであろうか。今のこの世において、傍観していないか、と問われているのです、特にクリスチャンは。これほどラディカルなことを私自身は言ってませんけれども、妻の口を借りて、ちょっとアジりました。（笑）

イエスに対する神の子、あるいはキリスト信仰は、イエスのこのような振舞いの結果としての十字架の死によって基礎づけられております。イエスはその結果、十字架の刑に処されたのですから。イエスの十字架に至るまで、「彼に従い彼に仕えた者たちは」、マグダラのマリアを始めとする女たちでありました（マルコ福音書の 15 章 33 ～ 41 節）。男弟子たちはペトロを始めとしてみんな逃げちゃってたんです、イエスが十字架に掛かったときは。 女子だけの大学だからって持ち上げるつもりはありませんけれど、聖書にそう書いてあります（笑）。

ただ、ここでは書いてありませんけれども、この箇所に対するルカ福音書の並行箇所 23 章では、イエスの処刑されたときに弟子たちもいるのです。逃げてないのです。ルカ福音書の著者は、マルコ福音書ではあまりにも女たちが突出するために男女のバランスを取ったんです。

イエスは始めから本質的に「神の子」であった、という信仰によって彼の振舞いを基礎づける方向性は、すでにマタイやルカ福音書に出ております。こういうことは、荒井英子は言いませんでした。しかし私は新約聖書学を背景として、はっきりそうだと思います。この場合、イエスによる現実批判は、後景に退きます。

これは比較的最近に、私が著者として出しました論文集『初期キリスト教の霊性―宣教、女性、異端』（岩波書店）の 5 ページから 14 ページに詳しく述べられておりますので、これも紹介しようかと思ったのですけれど、あまり時間がありませんから省略しました。特にルカ福音書の場合、祈るイエス、あるい

は瞑想するイエスというのは前面に出てきます。しかしそれと裏腹に、権力者に対する批判がずっと退きます。

キリスト教の方向性には、福音書が成立した原始キリスト教の時代は多様性がありました。これは認めなければなりません。どちらを取るかというのは、それぞれ取る人が責任をとって取るしかないのです。だからキリスト教には非常に多くの派があるのですね、取り方が違うものですから。

最後にやはり恵泉での話ですから、恵泉に関する話をして講演を終わりたいと思います。

恵泉のいわゆる建学の精神と呼ばれる「聖書・国際・園芸」が目指すキリスト教の方向性というのは、私の見解では、イエスと共に自然と人間のいのちを大切にする、キリスト教の再定義の方向性と重なると私は思います。

だいたい園芸を必修にするなどという学校はないですね（笑）。必修がいいかどうかは別として。しかも私は、園芸も聖書によって裏付けられると思っています。1992 年の春、私が恵泉に学長として就任した際に初めて入学式で語った新入生への祝辞の中で、私は「国際と園芸が、それを育む土壌としての聖書によって基礎づけられている」という話をしております。（『学ぶことの意味』恵泉女学園大学　入学式・卒業式式辞集〈1992 年 4 月～ 2002 年 3 月〉、私家版、2002 年 3 月発行、6 － 7 頁参照）。

ところがそれが最近出版された、高橋源一郎さんと辻信一さんの対談で『弱さの思想―たそがれを抱きしめる』（大月書店）の中に、英子や私とほぼ同じ考えが語られていました。

高橋源一郎さんは元来作家ですけれども、明治学院大学にもお勤めです。辻信一さんも文化人類学で明治学院大学にお勤めです。この対談を読んでいたら、私というより荒井英子の思想とそっくり同じなのです。お互いに全然知らないで同じ主旨のことを書いていたと思います。これはぜひ恵泉につながる人には読んで欲しいと思ってコピーしてきました。そこを読んで終わりにしたいと思います。（7 － 8 頁）

> 「パワー」は「フォース」と違って、内なる力のことです。たとえば、種子は木となる潜在的な力をもっている。それがパワーです。人間は誰でもブッダやガンディーのように、偉大な人になれるパワーをもっている。この内なる力がパワーであり、それこそが真の強さです。
>
> 一方、フォースとは外なる力です。たとえば、軍隊や警察は、銃、戦

車、核兵器、監獄などの強制力をもちます。人々を投獄し、拷問する暴力もまた、外なる力です。規則、法律、軍隊、武器、政府などによって、外から与えられる力—それがフォースです。お金というフォースによって、それが他人に権力をふるうこともできる。

フォースが他人への強制力であるのに対し、パワーは自分の内に働く力です。イエス・キリストは、パワーにあふれる偉大な人物でした。しかし彼は、「弱き者が世界を受け継ぐ」と言っていますね。 この「弱きもの」とはフォースをもたない人のことです。

弱き者は、腕力もずる賢さもなく、花のように柔和で優しい。花はしかし、パワーにあふれている。花はそのパワーで人を魅了します。その香り、やわらかさ、美しい色彩によって。また、自らを果実へと変えるパワーもあります。この花の力はフォースとしての強さではありません。パワーは、柔和で、穏やかで、目立たず、控えめです。花はなんと謙虚でしょう。押しつけがましいところがありません。真の力とはこのように、控えめで優しいものなのです。

たとえば、流れ落ちる水のように水はパワーにあふれていますが、いつも下へ向かって流れていく。決して上に向かわず、下に向かう。それが水の謙虚さです。土もとてもパワフルですが、謙虚です。英語の「土」と「謙虚」という言葉は同じ語源から来ているんですよ。〈ここには英語学とか英文学の先生もいますので、間違っているかも知れませんが。おそらくearthというのとearnestというのを引掛けたのではないかと思いました。〉土はいつも下にある。でも、食べ物を育て、保水する力を秘めている。建物を支え、私たちに歩く場所を与えてくれます。それほど強力なのに、しかし、土は何も強要しない。
(『サティシュ・クマールの　今、ここにある未来』、ゆっくり堂)

ここには古来からの東洋思想とシューマッハーの思想がこだましている。思えばシューマッハーは、生態系という「制約」と「限界」の中に万物が調和する姿に注目し、すべての生き物が「成長をいつどこで止めるかを心得ている」という「神秘」を、「小さいことは素晴らしい（スモール・イズ・ビューティフル)」と表現したのだった。そして、彼はこのエコロジーの観点に立って、有限性を敵視し、「無限成長」を唱え、貪欲を称揚する現代の主流経済学を痛烈に批判したのだった。

「人間の顔をもった技術」という記念碑的なエッセーの中でシュー

マッハーは、聖書の「山上の垂訓」（マタイによる福音書）を引き、そこには「生き残りのための経済学」の土台となる基本的な考え方がきわめて的確に示されている、と語った。
――柔和な人たちは、さいわいである、彼らは地を受けつぐであろう。〈5章5節〉

高橋さんも辻さんも、聖書学者ではありませんので、それには言及していませんが、マタイ福音書5章5節というのは、聖書学的に言えば旧約聖書の詩篇37編11節を前提とした言葉です。そして詩篇37章11節ではヘブライ語で「柔和な人たち」というのは「アーナン」というヘブライ語が使われています。アーナンというのは社会的弱者という意味です。

高橋さんも辻さんも、狭い意味での洗礼を受けたクリスチャンではないです。だけれども、ものすごく響き合います、私の考えと。だからといって私は、少なくとも私がイエスを介して信じている神を相対化するつもりはありません。私にとって神は私自身を相対化する視座ですので、そういう意味で私の信仰の対象としての、イエスを媒介として信ずる神というのは、私にとって唯一絶対の存在でありまして、そういう意味では、いわゆる宗教多元主義は採りません。ただ、それは、あくまで私にとって絶対なのであって、あるいは私の立場を共有する共同体にとって絶対なのであって、客観的に絶対であるという意味ではありません。客観的に絶対であると言ったら、自分を、あるいは共同体を絶対化してしまいます。ですから私は、私の信ずるキリスト教は限りなく相対性の中にありますけれども、私自身の責任をもって、そのうちの一つを選び取ります。それは祈りを共にし、それから、いわゆるパワーに対する批判的姿勢を貫き、そしていわば弱さを絆にお互いに寄り添い合う、そして共に我々を相対化する神を信じていくということです。その点を強調しておきませんと誤解される恐れがありますので付言しました。

以上です。ありがとうございました。

※引用文中の〈 〉内は講演中に語られた言葉。

日時：2014年5月31日（土）11：00～12：30
スプリングフェスティバルにおけるキリスト教文化研究所講演会
会場：恵泉女学園大学　G101教室

〔あらい・ささぐ　恵泉女学園大学名誉教授・元学長〕

《麦穂摘み》

マルコ二

23ある安息日に、イエスが麦畑を通って行かれると、弟子たちは歩きながら麦の穂
を摘み始めた。24ファリサイ派の人々がイエスに、「御覧なさい。なぜ、彼らは安息
日にしてはならないことをするのか」と言った。25イエスは言われた。「ダビデが、
自分も供の者たちも、食べ物がなくて空腹だったときに何をしたか、一度も読んだこ
とがないのか。26アビアタルが大祭司であったとき、ダビデは神の家に入り、祭司の
ほかにはだれも食べてはならない供えのパンを食べ、一緒にいた者たちにも与えたで
はないか」。27そして更に言われた。「安息日は、人のために定められた。人が安息日
のためにあるのではない。28だから、人の子は安息日の主でもある」。

ルカ六

1ある安息日に、イエスが麦畑を通って行かれると、弟子たちは麦の穂を摘み、手
でもんで食べた。2ファリサイ派のある人々が、「なぜ、安息日にしてはならないこ
とを、あなたたちはするのか」と言った。3イエスはお答えになった。「ダビデが自
分も供の者たちも空腹だったときに何をしたか、読んだことがないのか。4神の家に
入り、ただ祭司のほかにはだれも食べてはならない供えのパンを取って食べ、供の者
たちにも与えたではないか」。5そして、彼らに言われた。「人の子は安息日の主であ
る」。

マタイ一二

1そのころ、ある安息日にイエスは麦畑を通られた。弟子たちは空腹になったので、
麦の穂を摘んで食べ始めた。2ファリサイ派の人々がこれを見て、イエスに、「御覧
なさい。あなたの弟子たちは、安息日にしてはならないことをしている」と言った。
3そこで、イエスは言われた。「ダビデが自分も供の者たちも空腹だったときに何を
したか、読んだことがないのか。4神の家に入り、ただ祭司のほかには、自分も供の
者たちも食べてはならない供えのパンを食べたではないか。5安息日に神殿にいる祭
司は、安息日の掟を破っても罪にならない、と律法にあるのを読んだことがないのか。
6言っておくが、神殿よりも偉大なものがここにある。7もし、『わたしが求めるの
は憐れみであって、いけにえではない』という言葉の意味を知っていれば、あなたた
ちは罪もない人たちをとがめなかったであろう。8人の子は安息日の主なのである」。

（荒井献『イエス・キリストの言葉―福音書のメッセージを読み解く』岩波現代文庫、二〇〇九年より）

〈片手の萎えた人〉

マタイ一二

九イエスはそこを去って、彼らの会堂に入った。一〇すると、そのとき、片手の萎えた人がいた。
人々はイエスを訴えようと思って、「安息日に人を癒しても、さしつかえないか」と尋ねた。

一一イエスは彼らに言った、「あなたがたのうちに、一匹の羊を持っている人があるとして、もしそれが安息日に穴に落ちこんだなら、手をかけて引き上げてやらないだろうか。一二人は羊よりも、遥かに優れているではないか。
だから、安息日に良いことをするのは、正しいことである」。

一三そしてイエスはその人に、「手を伸ばしなさい」と言った。そこで手を伸ばすと、ほかの手のように良くなった。

一四パリサイ人たちは出て行って、何とかしてイエスを殺そうと相談した。

マルコ三

一イエスがまた会堂に入ると、そこに片手の萎えた人がいた。

二人々はイエスを訴えようと思って、安息日にその人を癒すかどうかをうかがっていた。

三すると、イエスは片手の萎えたその人に、「立って、中へ出て来なさい」と言い、

四人々に向って、「安息日に善を行うのと悪を行うのと、命を救うのと殺すのと、どちらがよいか」と言った。彼らは黙っていた。

五イエスは怒りを含んで彼らを見まわし、その心の頑ななのを嘆いて、その人に「手を伸ばしなさい」と言った。そこで手を伸ばすと、その手は元通りになった。

六パリサイ人たちは出て行って、すぐにヘロデ党の者たちと、何とかしてイエスを殺そうと相談しはじめた。

ルカ六

六また、ほかの安息日に会堂に入って教えていたところ、そこに右手の萎えた人がいた。

七律法学者やパリサイ人たちは、イエスを訴える口実を見付けようと思って、安息日に癒すかどうかをうかがっていた。

八イエスは彼らの思っていることを知って、その手の萎えた人に、「起きて、真中に立ちなさい」と言うと、起き上がって立った。

九それから彼らに言った、「あなたがたのうちで、自分の息子か牛が井戸に落ち込んだなら、安息日だからといって、すぐに引き上げてやらない者がいるだろうか」（一四）

九そこでイエスは彼らに向って言った、「あなたがたに聞くが、安息日に善を行うのと悪を行うのと、命を救うのと殺すのと、どちらがよいか」。

一〇そして彼ら一同を見まわして、その人に「手を伸ばしなさい」と言った。その通りにすると、その手は元通りになった。

一一そこで彼らは激しく怒って、イエスをどうかしてやろうと、互いに話合いをはじめた。

（荒井献『イエス・キリスト〈下〉その言葉と業』講談社学術文庫、二〇〇一年より）

201. 思い悩むな

（*no. 67* 参照）

マタイ 6.25-34

（*no. 67, p. 59*）

25「だから、言っておく。
自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、
また自分の体のことで何を着ようかと思い悩むな。
命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。
26空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、
刈り入れもせず、倉に納めもしない。
だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、
鳥よりも価値あるものではないか。27あなたがたのうちだれが、
思い悩んだからといって、寿命pをわずかでも延ばすことができようか。
28なぜ、衣服のことで思い悩むのか。野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。
働きもせず、紡ぎもしない。29しかし、言っておく。栄華を極めた
ソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。30今日は　生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、
神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか、信仰の薄い者たちよ。31だから、『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と言って、　思い悩むな。
32それはみな、　異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。
33何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。
そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。
34だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である。」

マルコ

ルカ 12.22-32

22それから、イエスは弟子たちに言われた。「だから、言っておく。
命のことで何を食べようか、
体のことで何を着ようかと思い悩むな。
23命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切だ。
24烏のことを考えてみなさい。種も蒔かず、
刈り入れもせず、納屋も倉も持たない。
だが、　神は烏を養ってくださる。あなたがたは、
鳥よりもどれほど価値があることか。25あなたがたのうちのだれが、
思い悩んだからといって、寿命nをわずかでも延ばすことができようか。26こんなごく小さな事さえできないのに、なぜ、ほかの事まで思い悩むのか。27野原の花がどのように育つかを考えてみなさい。
働きもせず紡ぎもしない。° しかし、言っておく。栄華を極めた
ソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。28今日は野にあって、明日は炉に投げ込まれる　草でさえ、
神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことである。信仰の薄い者たちよ。29あなたがたも、何を食べようか、
何を飲もうか　と考えてはならない。また、思い悩むな。
30それはみな、世の異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの
父は、これらのものが　あなたがたに必要なことをご存じである。
31ただ、神の国p　を求めなさい。
そうすれば、これらのものは　加えて与えられる。
32小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで
神の国をくださる。

（監修 荒井献・川島貞雄『四福音書対観表』日本基督教団出版局、二〇〇〇年より）

202. 天に宝を

（*no. 64* 参照）

マタイ 6. 19-21 (*no. 64, p. 58*)	マルコ	ルカ 12. 33-34
19「あなたがたは地上に富を積んではならない。そこでは、 虫が食ったり、さび付いたりするし、また、盗人が忍び込んで 盗み出したりする。 20 富は、天に積みなさい。そこでは、 虫が食うことも、さび付くこともなく°、また、盗人が忍び込むこと も盗み出すこともない。 21 あなたの富のあるところに、あなたの心もあるのだ。」		33 自分の持ち物を売り払って施しなさい。 擦り切れることのない財布を作り、 尽きることのない富を天に積みなさい。そこは、 盗人も近寄らず、 虫も食い荒らさない。 34 あなたがたの富のあるところに、あなたがたの心もあるのだ。」

（監修 荒井献・川島貞雄『四福音書対観表』日本基督教団出版局、二〇〇〇年より）

ここに熱河伝道の性格がいみじくも現われていよう。すなわち、伝道に福井も後述する砂山貞夫も、本人の意識としては非政治的宣教活動を自認しているが、[23] 彼らが伝道に出かけた監獄には、日満軍・憲兵・警察などに捕まった無数の中国人がおり、また砂山が医療伝道に出かけた村々には、無人区・三光作戦の犠牲者であった農民がいた。彼らが祈りと伝道に明け暮れしていたのは、まさにそのような時期であった。それを「次元の異なる世界の出来事」と捨象し、「ただ聖言にのみ生きる」道を説いたところに、熱河伝道とりわけ福井の伝道の特徴が現われている。「聖言にのみ生きる信仰」と「血を流し合っている現実」とが接点を結ばない。言い換えれば信仰と人権（人間の尊厳）の乖離という問題である。

しかしこれは、熱河伝道に固有の問題というよりも、「伝道」それ自体がもっている問題と言えなくもない。私の研究課題の一つであるハンセン病とキリスト教との関わりにおいても、同様の問題性を指摘できるからである。[26]「近代日本のキリスト教「救癩」活動は、ハンセン病患者救済への並々ならぬ情熱をもって始められた。しかし同時にそれは、「隔離」を前提に行われたものであった。療養所伝道によって伝えられた福音は、端的に療養所での隔離生活を生き抜くために、十字架のイエスを仰ぎ、不満や怒りを静め、さらに皇恩に感謝して生きるようにとの勧めであった。信仰者は社会的変革などを求めるのではなく、どんなに屈辱的な政策であれ、社会の偏見差別であれ、信仰を鍛える試練として受け入れなければならなかった。こうして療養所で説かれた「苦難の受容」は、結果として「隔離の受容」を入所者たちに促していくことになる。人間の尊厳が踏みにじられていることを、宗教的言説が覆い隠すのである。このような「伝道」の果実として、苦難に打ち勝つことこそ真の信仰であるとの確信に満ちたクリスチャンが生まれる。一九九八年にハンセン病元患者らが提訴したハンセン病国家賠償訴訟において、原告に加わらなかった在園のキリスト者から以下のような発言が聞かれた。「宗教の役割はこの世を突き抜けたところにある」、「宗教者は社会変革など求めないのだ」と。

しかし聖書に証言されているイエスは、人間性を疎外する政治的権力や宗教的権威に対しては激しい現実批判の振る舞いに出た。人間の尊厳を奪いつくして、差別や偏見を甘受させるような宗教的言説には真っ向から対立した。イエスは、時代や社会に対する批判的精神をもちつつ、病む者・力なき者と同じ地面に跣足で立ち、解放の主体へと彼らを促したのである。[27]伝道は諸刃の剣、人々を「救済の客体」に閉じ込める方向性と「解放の主体」へ促す方向性、この二面性を合わせ持つ。歴史的状況を捨象して前者の道を突き進むとき、時として伝道それ自体が「犯罪性」を帯びることになる。国賠訴訟の原告団長であったハンセン病回復者島比呂志は言った。「傍観は黙認であり、黙認は支持であり加担である」と。熱河伝道者たちはこの言葉をどう聞くであろうか。

（荒井英子著・荒井献編　『弱さを絆に―ハンセン病に学び、がんを生きて』教文館、二〇一一年）

「パワー」は「フォース」と違って、内なる力のことです。たとえば、種子は木となる潜在的な力をもっている。それがパワーです。人間は誰でもブッダやガンディーのように、偉大な人になれるパワーをもっている。この内なる力がパワーであり、これこそが真の強さです。

一方、フォースとは外なる力です。たとえば、軍隊や警察は、銃、戦車、核兵器、監獄などの強制力をもちます。人々を投獄し、拷問する暴力もまた、外なる力です。規則、法律、軍隊、武器、政府などによって、外から与えられる力――それがフォースです。お金というフォースによって、それが他人に権力をふるうこともできる。

フォースが他人への強制力であるのに対し、パワーは自分の内に働く力です。イエス・キリストは、パワーにあふれる偉大な人物でした。しかし彼は、「弱き者が世界を受け継ぐ」と言っていますね。この「弱き者」とはフォースをもたない人のことです。

弱き者は、腕力もずる賢さもなく、花のように柔和で優しい。花はしかし、パワーにあふれている。花はそのパワーで人を魅了します。その香り、やわらかさ、美しい色彩によって。また、自らを果実へと変えるパワーもあります。この花の力はフォースとしての強さではありません。パワーは、柔和で、穏やかで、目立たず、控えめです。花はなんと謙虚でしょう。押しつけがましいところがありません。真の力とはこのように、控えめで優しいものなのです。

たとえば、流れ落ちる水のように水はパワーにあふれていますが、いつも下へ向かって流れていく。決して上に向かわず、下に向かう。それが水の謙虚さです。土もとてもパワフルですが、謙虚です。英語の「土」と「謙虚」という言葉は同じ語源から来ているんですよ。土はいつも下にある。でも、食べ物を育て、保水する力を秘めている。建物を支え、私たちに歩く場所を与えてくれます。それほど強力なのに、しかし、土は何も強要しない。（『サティシュ・クマールの　今、ここにある未来』、ゆっくり堂）

ここには古来からの東洋思想とシューマッハーの思想がこだましている。思えばシューマッハーは、生態系という「制約」と「限界」の中に万物が調和する姿に注目し、すべての生き物が「成長をいつどこで止めるかを心得ている」という「神秘」を、「小さいことは素晴らしい（スモール・イズ・ビューティフル）」と表現したのだった。そして、彼はこのエコロジーの観点に立って、有限性を敵視し、「無限成長」を唱え、貪欲を称揚する現代の主流経済学を痛烈に批判したのだった。

「人間の顔をもった技術」という記念碑的なエッセーの中でシューマッハーは、聖書の「山上の垂訓」（マタイによる福音書）を引き、そこには「生き残りのための経済学」の土台となる基本的な考え方がきわめて的確に示されている、と語った。

――柔和な人たちは、さいわいである、彼らは地を受けつぐであろう。

（高橋源一郎＋辻信一　『弱さの思想―たそがれを抱きしめる』大月書店、二〇一四年）